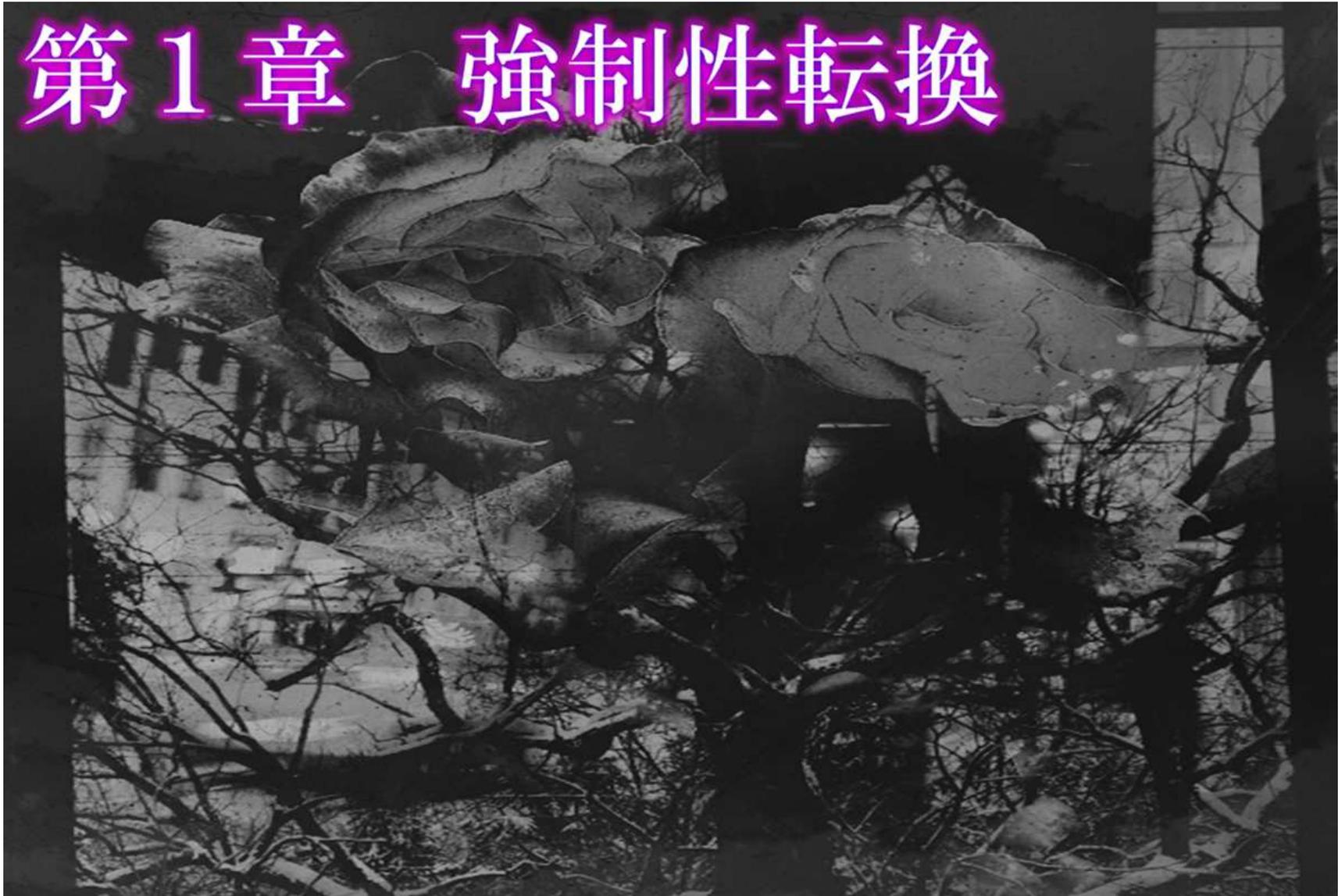




第1章 強制性轉換



俺は、全裸になってミニマムの足元に土下座をする。
そして、腰の後ろに手を回した。

「ミニマムは俺の頭を踏みながら俺の手首を後ろ手のまま縛り上げる。
「ふうくん？ よっぽどバレたくないんだね」
その通りだ。

俺は身バレしたくない。

現実世界で守りたいものがあるからだ。

「でも、許さないニヤ♥ どこまで我慢出来るか競争だニヤ」

ミニマムは口元をそつと歪め、悪意をちらつかせる。

後ろ手に縛り上げた俺は、そのまま鼻フックをかけられ天井から吊るされた。

そして俺の体を縛り上げるキツイ縄が、俺の腰から足にかかる。

初めて縛られたが、抵抗はできなかった。

俺はこのままでいられないからだ。

現実世界のままの格好で、このフルダイブシステムの世界にはいられない。

どんなことがあっても女のカラダを手に入れて、そっちで逃げ延びる算段が必要なのだ。

俺は、女にならなければならぬ。

「んじやく、はじめよつかニヤ♥」

ミニマムはステータス改造画面を起動させる。

そして俺の体であるはずの女性が、目を覚ます。

否。

俺の意識が、男の体を感じている「縛られる苦痛」と女のカラダを感じている「縛られる苦痛」の両方を認識する。

左右反対の足を吊るされているからだろうか。

まるで空中に浮いていて、M字開脚をさせられているように感じる。

「男の方はここしか『入れる穴』が無いニヤあ？」

「うぐうっ!？」

ミニマムはそう言うと、なんの愛撫も無しに俺のケツにドギツイものを差し込んできた。
生まれて初めて、アナルに物を入れた。

いや、入れられた。

激しく痛む。

ズキズキと。

固く、違和感と呼ぶにはあまりにも大きな痛み。

「あぐううううっ!!!？」

声を挙げずにはいられなかった。

ケツの穴が強制的に広げられている感覚が、どうしようもなくムカつく。

ケツに差し込まれているという感覚さえなければただの痛みだというのに…。
このケツの穴の広げられている痛みがあるせいで、俺は感じずにはいられない。
たった今、俺のケツにはバイブが差し込まれているのだ、と。

悔しいさ！

辛いさ！

痛いさっ！

でも今は抗議の声など上げてはならない。

なんとかして現実世界のこの顔を、晒すことだけは避けなければならないのだ。

そうしないと、向こうに戻った時。

俺の居場所はない。

「こっちには入れる専用の穴があるニヤ♥

処女モード起動っ」と

ミニmamはそう言うと、女の方の俺のマ○コに俺のケツに刺さっているバイブと同じ物を、同じように愛撫無しで差し込む。

「あぎやああっ！！！！！」

俺は体を強張らせたままで、声を上げる。

先ほどとは似て非なる痛み。

チ○コの穴に無理やり棒を突っ込まれたかのような痛み。

痛みの質は同じなのに、質量が違う。

あまりにも痛む。

当たり前だ。

チ○コの穴にチ○コの形をした異物を押しこめば、激しく強く痛む。

—これが女の、処女の痛みか—

初めての女が泣き叫ぶ気持ちがよく分かった。

泣いて中止を懇願する気持ちがよく分かった。

俺もそうしたくてたまらない。

考えても見てほしい。

ケツに自分のチ○コと変わらないバイブを突っ込まれ、同時にチ○コの穴にも同じ物が刺さっているんだぞ？

死ぬるものなら、死んでしまいたい。

「ニヤハハハハハハ♥

もがいている。もがいている(笑)」

だが、俺は…。

勃起していた。

「射精できたら、意識を女の方だけにしてあげるよっ！」

笑いながら、ミニmamはそう言った。

むしろ、体を根こそぎ削り取られたような感覚だ。

ケツのあたりの肉ごと、叩かれて消し飛んだのではないかと思いたくなる痛み。

脳が痛みの感覚を一部麻痺させているのが、自分でも分かる。

女の方の俺の体がギシギシと揺らぐ。

ダメージを支えきれず、体に力が入らなくなったのだ。

支えきれなくなった体は、縄で吊られている手首に全体重がかかる。

「あぐうあああああつ！！！！！！」

はあ、はあ、ああ、はあはあ、はあ

俺のケツは…。

元来の男のケツは女のそれより硬いせいかな、痛みの残り方が違う。

男のケツならこんなにも表面から熱さがじんわりと中に染みこんできたりはしないだろう。

女のケツのほうが柔らかいからこういうことになるのだ。

「呼吸は落ち着いた？」

じゃあ、次はこっちなね？」

ミニマムは男の方の俺のケツに向けて、小さな手が円を描く。

そして……。

「あぎいぎぎぎぎぎつ！！！！」

痛い！

痛い痛い痛い痛いっ！

頭の中がそれで埋まる。

痛みで、マッサラになる。

俺の視界は真っ赤なセロファンでも目に貼りつけたかのように、赤く染まる。

赤黒くではなく、赤い透명한色合いだ。

「どうする？ どうする？」

体力ゲージ、もう残ってないよ？」

ミニマムは俺のゲージを指指して笑った。

この赤い視界は死亡寸前を知らせるシグナルだ。

「くすくす。男のくせにお尻を叩かれて、死んだら……………」

恥ずかしくて、もうお外は歩けないね♥

俺はその挑発に乗らないよう下の唇を噛む。

もしもここで睨み返してでも見る。

もう一発ケツに喰らって、ジ・エンドだ。

それは俺の望むエンドじゃない。

おれは生きたい。生きて、現実世界に帰りたいんだ。

だから俺は肺の空気を絞り出して、(それでも小さなかすれ声にしかならなかったが…)

懇願の声を上げる。

「お、お願いです。どうか…どうか許して…下さい。

これ以上叩かないで…。

お願いですから」

自分の体の異変など意識などしていなかったが、俺の言葉を聞いたミニママは俺の股間を指指して、さらに大きな声で俺を嘲笑った。

「ニヤハハハっ！

お前、何自分の言葉に興奮してんだよっ！

勃起も勃起。

フルボツキになってるニヤ〜♥」

俺は顔が真っ赤になって、のぼせてゆくのが自分でも分かった。

そして、赤い視界の端が涙で滲む。

俺はそのまま震えているしか選択肢がなかった。

「しょうがないニヤ〜。

ほれっ！」

ミニママは悪魔の手袋したままで、女の方の俺のマ〇コに突き刺さっているバイブをガタガタ力任せに揺する。

「あぎいいいいいいいっ！！！！！！！！！！」

裂かれる！

裂かれる！

裂かれる！！！！

俺は体が壊れることを覚悟した。

そして覚悟とともに、股間から溢れ出す。

精液が一気に発射され、吹き出す。

「ニヤハハハハハっ！！！！！！

だっさ〜〜〜。

それでも男かよ〜」

俺は逝った。

女の方の体に差し込まれたバイブで…。



順序が逆になってしまったが、おれがなぜこんなことになったのかの話をしたい。

―プレイヤーナンバー 93666・2 岡田トキオ。

貴方は、TSオンラインの基本ルールであるネカマ禁止を破りました。

罰として、恥辱ゲージを枷とします。

他、些事はゲームマスターである私に従ってもらいます―

英雄であるキ〇トさんが世界の種子を、ネット上に無料配布して半年。

俺は新たに作られたフルダイブシステム「TSオンライン」の世界にどっふりはまっていた。

そして、いつもの通り『世界』に飛び込んだ途端、俺はゲームマスターに捕縛された。

曰く、「ネカマ疑惑」だそうだ。

実際その通りである。

俺はいわゆる『ネカマ』だ。

現実世界では男なのに、バーチャルMMO世界では女キャラを演じている。

別に他プレイヤーをからかおうとかそんな悪意があったわけじゃない。

ただ、普段と違う気分を楽しみたかった。

その程度の軽い気持ちだ。

だから男を誘ったりとか、そんな馬鹿なこととはしていない。

しかし…。

そんな事情は考慮されないようだ。

「さて…。罰は受けてもらうよ?」

ゲームマスターの声が、天から降り注ぐ。

俺のステータスゲージが勝手に開き、手持ちのマナー数値を「0」に替える。

「あ……………」

そしてレベル。

せっかく150まで上げたのに、あつという間にレベルも「1」に落とされた。

TSオンラインは開始当初のレベルが「3」なので、おれは新参者よりもさらに弱くなつてしまったことになる。

新規参加の形でエントリーしなおしても無駄だろう。

恐らくはIPアドレスも確保されている。

しかし…、罰はそれだけでは済まされなかった。

「じゃあ、おいで」

目が覚めると、打ちっぱなしのコンクリ天井が見えた。
俺が寝ている床も。左右全ての壁も打ちっぱなしのコンクリ。
出口はない。

慌てて逃げるための魔法を唱えたが、無駄だった。

レベル1では詠唱可能な魔法は無い。

というか、MPが「0」だ。

移動アイテムのゲージを開く。

やはり空だ。

「ここで餓死でもしろってことか？　　というかここが監獄ステージなのか？」

俺は虚空につぶやく。

誰かに聞いてもらいたかったわけではなく、ただ心の声が漏れてしまったただけだ。

自覚していなかったが、そのくらいレベルが下げられたことがショックだったのだろう。

「ここはもつと、…恐ろしいところニヤ」

声が出た。

ゲームマスターの声だが、先ほどのアナウンス用の声ではなくプレイヤーが使用するキ

ャラヴォイス。

俺の足元から聞こえた気がする。

その床から、黄金色というよりもさらに濃い金色の頭が生えてきた。

否。

足元のコンクリを金髪のツインテール女性キャラがすり抜けて上がってきた。

背は低い。

年は…若く見える。

「炉」と言われても仕方ないくらいに。

あまり戦闘用とは思えない身体。

しかし瞳には闇とピンクの混ざった光が籠っている。

恐らくは強い。それも相当に。

魔法特化型だろう。

しかもゲーム中最強の悪魔系装備で全身を固めている。

レベルが下げられる前の俺だったとしても、まず勝ち目はない。

そう直感が告げている。

「はじめ！」

ミニマムはそう言って笑った。

無邪気に見える笑顔の横にキャラゲージが見える。

ーTSオンラインゲームマスター ミニママー

間違いなくそう書いてある。

「げ、ゲームマスターっ!？」

「はじめ! って挨拶したでしょ? 挨拶は?」

「は、はじめ?」

「そ。はじめまして。略して『はじめ!』あたし、無駄は嫌いなんだよね」

「∴。Gの付くイタリアのマフィアみたいだな。っていうかホントにゲームマスター? イタリアマフィアの件に、気を良くしたのかミニママは「ふふん♥」と鼻を鳴らす。

「そ。あたしがこのTSオンラインを作ったの。」

カ○バ博士の世界の種子「ザ・シード」を使ってね。

ところで、ゲーム開始の最初にネカマ禁止ってちゃんと表示したでしょ?

それなのにお兄ちゃんもネカマしちゃったからさ……。

お仕置きを受けてもらうよ?」

ミニママの口元がゆがむ。

「いや∴。ちよつと待ってくれ。」

俺はレベルも下がったし、アイテムもマネーも全額没収されたんだ。

MPだって無い。

これでさらにまだ罰が必要か?」

「うん♥」

「∴」

「具体的には、恥辱ゲージを付けさせてもらうよ」

「恥辱ゲージ?」

「そ。略して恥ゲっ!」

そうミニママがいうと、俺のステータスに見たことのない紫色のゲージが光る。

「このゲージが溜まると、レベルが一つ戻るよ。」

150まで戻せたらアイテムもマネーも全額返してあげる。

もちろん現実世界にも帰してあげるね♥」

「∴ちよつと待て」

俺の呼び止めに、ミニママは「はニヤ?」と小首をかしげる。

そして、「ははあ?」と声に出して笑った。

目元と口元を歪め、闇とピンクの混じった瞳の奥に悪意を見せながら。

「もしかしてまだ気が付いていなかったニヤ?

もうトキオは出られないよ。

ソードアート○ラインの件知らないの?」

知っている。

ログアウト不可のデスゲーム。

俺が尊敬するキ〇トさんがクリアーし、あのゲームは終わった。

そしてログアウト不可の設定は絶対にかけることが出来なくなつたと、ネット記事で読んだ。

「トキオにかけた罰は、それニヤ。

恥辱ゲーが貯まってレベルが戻るまでログアウト不可だから。

そのつもりで♥」

ミニマムはそういうと、俺のこの世界での体であつたはずの女キャラが俺の横に現れた。それも全裸、後ろ手に縛られ、片足と鼻を吊るされている。

「はっ！」

俺はようやく気が付いた。

いつの間にか俺が、俺でいることに。

俺はネカマ用のあのキャラではなく、現実世界の俺の体に戻っている。

だが存在する場所はTSオンライン。

「もしかして混乱してる？」

本当にSAOのことを知らないんだね。

あの世界ではプレイヤーの現実での肉体がプレイヤーキャラとして作動していたんだよ。あたしはそれを流用した。

つまり今、岡田トキオのプレイヤーキャラは岡田トキオの現実世界の体そのものが適用

されているんだよ♥」

俺は顔から体温が無くなっていくのを感じずにはいられなかった。

つまり俺は今、現実の世界の体、顔でいるということだ。

現実世界の俺が、バレた。

…脅されるっ！！！！

そういう感情に包まれてすぐに俺は対抗策を練ろうとした。しかし。

そんなものは存在しない、ということに気が付くまでに時間はかからなかった。

IPアドレスも、顔もバレている。

個人を特定するには十分だ。

あとは時間をかければ良いだけ。

「ニヤはっ♥」

「お願いです！　せめて仮想キャラで……」

「仕方が無いニヤあ。

それじゃあ、そのままの格好で逝けたら意識を女だけにしてあげるニヤ♥」

俺はゲームマスターのミニマムに懇願する。

もはや……、雌雄は決した。

見た目こそ背も低く、「炉」と呼ばれても文句の言えない身体の女に、俺は全装備を強制解除され、全裸にひん剥かれた上で彼女の足元に膝を付く。

そしてミニマムの指示通りに腰の裏に両手を回し、後ろ手に縛り上げられた。縛り上げられるだけでは無い。

片足も含めて、天井から吊るされた。

鼻には鼻フック。

隣で同じように縛られている、俺がここであるべきはずの女性。

俺は今からこの格好のまま。

オナることも出来ないままで逝かなければ、現実世界と同じ顔。

同じ身体でこのフルダイブシステムの世界を生きなければならなくなる。

それはどんなことがあっても阻止しなければならぬ。